

# 【研究論文】 日本語教育史における松本亀次郎と周恩来の師弟関係に関する一考察

岩澤 平

日本大学大学院総合社会情報研究科前期課程修了

## Considering the teacher-student relationship between Kamejiro Matsumoto and Zhou Enlai in the history of Japanese education

IWASAWA Yasushi

M.A., Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

---

The purpose of this study is to consider the teacher-student relationship between Kamejiro Matsumoto (1866-1945), a Japanese teacher, and Zhou Enlai (1898-1976), the future Chinese premier who was one of his students, in the context of the history of Japanese language education. In particular, in response to the question "Did you ever teach Zhou Enlai?" by Wang Xiangrong, a Chinese student who came to study in Japan during the Sino-Japanese War, Matsumoto replied, "I don't remember." This paper aims to clarify the reason and true meaning behind this latter assertion.

---

### 1. はじめに

日本語教育史において、1895年の台湾統治から1945年の第2次世界大戦終結までの期間は、「侵略的日本語普及教育の時代」<sup>1</sup>と呼ばれる。これは主に台湾や朝鮮半島の植民地において、言語政策の一環として行われた国語教育(日本語教育)及び中国をはじめアジア諸国への侵略政策の下、「大東亜共栄圏の共通語」として行われた日本語教育のことである。しかし、戦前同時期に5万人以上とも言われる中国人留学生に対して行われた日本語教育があり、松本亀次郎(1866-1945)は、「中国人留学生教育の中心人物」であり「日本語教育の代表者」であった<sup>2</sup>。

彼のもとで学んだ中国人留学生は2万人以上と言われ、若き日の周恩来(1898-1976)もその一人であった。周恩来の日本留学時代(1917-1919)に関しては、留学時の日記の記述内容等から、松本が周恩来の「個人教授」をしたことが、王・高橋(2002)、鷺山(2015)、岩澤(2020)等の先行研究によって略解明されている。しかし一方で、日中戦争時に日本に留学し、松本の「最後の教え子」となった汪向榮(1920-2006)が、松

本に「周恩来も教えられましたか」と質問した際に、「おぼえていない」と答えたとの発言があり<sup>3</sup>、この発言の真意とその理由については解明されていない。

本研究の目的は、松本のこの発言の真意と理由について、汪向榮や松本の遺族の証言及び日中戦争時にマスコミ報道された周恩来に関する記事に基づき、実証的に分析し解明することである。また、松本と周恩来の師弟関係を通して、日本語教育史において松本が果たした役割と今日的意義について再考する。

### 2. 松本の中国人留学生への日本語教育歴

本章では、松本の中国人留学生に対する日本語教育の教歴概要を確認する。なぜなら、松本の周恩来に関する発言の真意とその理由を解明するためには、松本の中国人留学生教育における立場やその影響力を正しく理解することが欠かせないからである。

松本は1903年、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎が中国人留学生のために設立した宏文学院<sup>4</sup>に日本語教師として招聘され、それまで15年間の国語教員の職を辞して、中国人留学生への日本語教育とい

う新しい仕事に就いた(37 歳)。同学院で日本語を教えた学生の中には、後に中国文学の文豪となる若き魯迅もいた<sup>5</sup>。1908 年、清朝より京師法政学堂(北京大学の前身)の日本語教習に招聘されて渡清し、約 4 年間同学堂で日本語教育を教授した。1912 年、辛亥革命による清朝滅亡のため帰国し、東京府立第一中学の国語教諭に就任した。しかし辛亥革命後急増した中国人留学生から日本語の教授を懇願されたため、1913 年、日本大学の教室を借りて日本語講習会を始めた。その後も受講者が際限なく増え続けたため、1914 年、「日華同人共立・東亜高等予備学校」(通称：東亜学校)を創立した(48 歳)<sup>6</sup>。同校は日本最大の中国人留学生機関として発展し続け、つねに千名前後の学生が在籍し、特に周恩来が在籍した 1918 年の在籍留学生数は、2 千名以上に達していた<sup>7</sup>。同校の卒業生は、東京高等師範学校(現筑波大学)や第一高等学校(現東京大学)をはじめ著名な大学、高等学校、専門学校等に多数進学したので、同校は「留学生教育の一大貯水池」と呼ばれた<sup>8</sup>。戦前の中国人留学生は 5 万人以上とも言われるが、その内 2 万人以上がこの「東亜学校」で学んだ。松本は晩年まで同校の教壇に立ち続け、また日本語教科書の編纂にも力を注いだ。最晩年は郷里の静岡県に疎開し、終戦直後の 1945 年 9 月に逝去した(享年 79 歳)。汪向榮は自身の体験を踏まえ、「東亜学校」と松本編纂の日本語教科書が「中国の近代化」に与えた影響について、それぞれ次のように記している。

#### 「東亜学校」について

日本にきたばかりの中国人学生は一般に、簡単な日常会話をこなせるくらいで、日本語はあまり修得していなかった。まったくできない者もあった。それで、予備教育の段階を経なければならなかった。正式の学校に入学するまえに、予備学校に入り、一定期間の訓練をうけたあと、高等学校や大学に進学、日本人学生と同じ教育を受けたのである。…予備教育はきわめて重要な段階であった。言語や文字の知識ばかりでなく、日本の教育にふれさせ、理解させた。…この最初の印象は、のちのちまで日本に対する見方や感情に影響したことであろう。…日本に来

た中国人留学生が予備教育を受ける過程で、先生は留学生の世界観、とりわけ、日本観の形成に、かなりの影響を及ぼした。<sup>9</sup>

また「日本語教科書」については、以下 6 点をあげ、その影響力について記している。

(筆者注：書名、初版発行年、重版回数の順に記す)

- ① 『言文対照漢訳日本文典』1904年(40版)
- ② 『日本語教科書』1906年(19版)
- ③ 『漢訳日本語会話教科書』1914年(17版)
- ④ 『漢訳日本口語文法教科書』1919年(24版)
- ⑤ 『訳解日語肯綮大全』1934年(13版)
- ⑥ 『華訳日本語会話教典』1940年(2版)

彼の執筆になる中国人のための日本語の教科書、参考書が一世を風靡し、日本語を学ぶ多くの中国人がこれを用いた。したがって、間接に彼の教えをうけた人間は、いっそう数が多い。直接教えた中国人学生のなかには、秋瑾や魯迅、周恩来もいた。中国の近代化、とりわけ文化教育の面で貢献した無名の学生となると、数えきれない。<sup>10</sup>

以上のように、1903 年(宏文学院時代)から 1945 年の終戦に至るまで、松本が生涯を捧げた中国人留学生教育及び彼の編纂した日本語教科書は、戦前の中国人留学生教育史そのものであり、松本が「中国人留学生教育の中心人物」と言われる所以である。

### 3. 松本の最後の教え子・王向榮

本章では、松本に「周恩来も教えられましたか」と質問した汪向榮について論述する。およそ松本の中国人留学生教育の実情や発言等を知るためには、松本の著作を除けば、松本のもとで学び親密な交流を重ねた「最後の教え子」である汪向榮の著作における証言なくしては不可能と言っても過言ではない。それは戦時中という特殊事情下での二人の師弟関係であったからでもある。なお、汪向榮は「東亜学校」で学んだ後、京都大学に進み、帰国後「中日関係史研究家」となり、文化大革命等の長い苦難を乗り越

えて、晩年、中国人留学生教育について論述した著作<sup>11</sup>も執筆している。本章の内容は、主に汪向榮の日本留学時代について、中国の歴史家・鍾少華によるインタビューに基づくものである<sup>12</sup>。

汪向榮が来日したのは、1940年のことである。日中戦争は、1937年7月7日の「盧溝橋事件」以降、「全面戦争」に発展、特に1940年当時は益々泥沼化していた時だった。汪向榮は、上海復旦大学の学生であったが、幼少より「抗日教育」を受け、実際に上海での日本軍による占領支配の凄惨な実態を目の当たりにしたため、日本人に対する印象は極めて悪く、抗日戦争の医療隊に参加したこともあった。しかし一方で、すでに亡くなった曾祖父が、かつて北京で京師法政学堂総教習代行を務めていたことがあり、家庭では、「日本人がみんな悪いのではない。法政学堂の先生たちはたいへんよいひとたちだった」という曾祖父の言葉が言い伝えられていた。そこで「中国を侵略する悪い日本」と「すべての日本人が悪いわけではない」というギャップに対して「いったいこれはどういうことなのか。自分の目で確かめてみたい」と思うようになり、熟慮の末、家族をはじめ周囲の反対を押し切って日本留学を決めたという。日本に来るとすぐに松本の「東亜学校」に入学し日本語の勉強に励んだ。ある時、学校で「松本校長はかつて(曾祖父も勤めた)京師法政学堂で教えていた」という記事を見つけ、「もしや」と思い松本に手紙を送ったところ、驚くことにその数日後、松本本人がその手紙をもって汪向榮の下宿先を訪ねてきた。それは松本が、かつて京師法政学堂で働いていた時に中国側の責任者であった汪向榮の曾祖父を良く知っていたからであった。この時の初対面の会話で注目する点は、日本語学習を始めたばかりの汪向榮に対して、初めから日本語を話させ、発音等に間違いがあればすぐに訂正し、正確にできるまで何度も繰り返させた。つまり松本の汪向榮への日本語の個人教授がすぐに始まったのである。松本はかつて留学生の周恩来に対しても日本語の個人教授をしたことがあるが、恐らく同じようなやりとりをしたであろうことが推測できるエピソードである。汪向榮は、「松本先生は、私を最後の教え子にしてくださいました。」また「先生はどこまでも私を弟として扱ってください

り、異邦人だからといって他人扱いするようなことはなかった。」と語り、更に「私も次第に先生にちょっとしたことを敢えて質問したり、自分の考えを話すようになっていた。」とも述懐している。こうした親密な交流の中で出てきたのが、以下の質問である。

多くの中国の名士たちが先生に学びました。魯迅とか錢稻孫といったひとたちです。「周恩来も教えられましたか」と聞いたことがあります。先生は、おぼえていないとおっしゃいました。周恩来の同級生だった張というひとのことはおぼえていらっしゃいました。胡華教授が『中国革命史』を書くときに、日本での最初の先生はだれかと周恩来に聞いたそうです。そのとき周恩来は、松本亀次郎先生とこたえています。これは胡華教授が発表した『社会科学戦線』第二期に書いてありました。(下線は筆者による)

この会話は、1940年秋から翌年春までの出来事である。しかし当時は日中戦争最中で日本全体が「治安維持法」<sup>13</sup>による厳しい言論統制下にあり、松本は常に特別高等警察(以下、「特高」)の監視下にあった。

#### 4. 松本と日中戦争

本章では、松本が日本の中国侵略戦争に対して、どのような考えを持ち、いかなる主張をしたのか、またそのことにより、どのような影響を受け、戦時中の松本を取り巻く環境はどのようなものだったのかについて考察する。

##### 4.1 日本の中国侵略政策に反対を表明

日本の中国への侵略戦争の発端は、1931年9月18日に勃発した「満州事変」に遡るが、岩澤(2020)は、当時の時代背景と松本が「満州事変」勃発直前に著した著作について、以下の通り論述している<sup>14</sup>。

当時日本陸軍・関東軍は、満州における日本の権益を守るために、満州の主権回復を主張する中国から、満州を切り離して日本の直接支配下に置くべく「満州事変」を画策し実行した。すでに「満州事変」が勃発する3年前の1928年

には、東北部の軍事的支配者・張作霖を爆殺する謀略事件も起きており、中国での排日・抗日運動は益々盛んになっていた。こうした時期(1930年)に松本は、外務省・文部省の委嘱を受けて中国教育事情の視察旅行を行い、現地で具に実情を視察した上で、『游記』<sup>15</sup>を著わし、教育者の立場から中国への侵略政策に対する反対を表明し、各界要人にも贈ったのである。その中には天皇側近・侍従長の鈴木貫太郎や「満州事変」の遂行責任者・関東軍司令官の本庄繁もいた。序文に、「予は原来熱心な親善論者で、切情の迸る所、婉説するの遑無く、思はず露骨な直言と成った」<sup>16</sup>と記していることから『游記』は単なる「教育視察報告」ではなく、当時の日本の中国政策に対する彼の意見を表明し、進言する意図が読み取れる。(下線は筆者による)

上記の松本が「思はず露骨な直言」と表現した進言の最たるものは、『游記』の最後に記した以下の結びである。

これ予が最後に一言したき事項である。民国は今や民族的に目醒め『民国は民国人の民国だ、民国内に於ては、領土・法権・政治・経済・文化・教育の全般に渡り、他国の侵略を許さぬという思想』約言すれば『打倒帝国主義』なる思想は、可成り濃厚に行き渡り、殊に小中学生徒に対して、鼓励が最も能く行き届いている。此の時に当り、日本人が僅かに一日の長を待み、依然として日清日露両役戦勝の旧夢より目醒めず、『民国人は個人主義だ』『国家的觀念が乏しい』『全国統一など出来る者か』『憲法政治など河清を待つ類だ』などと言って、見くびって居たら、大間違ひである。…民国は、今や眠れる獅子に非ずして、国を挙げて自覚し勇猛に帝国主義に反抗してをるのである。列強にして、此の後尚依然として旧時の压抑を加へば、民国は弥々反発的に奮起するのみで、压抑を加へた国に、何等の利益を将来せぬのみならず、永久に悪感を残すばかりである。…彼を知らず、己を知らぬ者ほど、愚かな者はない。己惚れと慢

心は失敗を招く基だ。…重ねて言ふが、真の提携は相知り相信ずる者の間にのみ行はるべきもので、其の点に就いては、両国家相互の関係も、個人相互の交際と、毫も変りが無い筈だ。…予は我が国家を愛すると同時に、新興民国の新建設に対して、熱心に其の前途を祝福し、永遠に両国家の共存共栄を祈るの外、他意なきことを表明して本篇の終結とする次第である。<sup>17</sup>

(下線は筆者による)

以上のように、『游記』は、松本が日本の中国侵略政策に真っ向から異議を唱える内容であったことから、一般世間では知られずとも、その反響は大きかった。このことは、『游記』を贈られた人々から届いた多数の礼状の内容から分かる。中でも注目すべきものは、天皇側近・侍従長の鈴木貫太郎<sup>18</sup>と関東軍司令官・本庄繁<sup>19</sup>からの返信である<sup>20</sup>。ここで二人の返信を分析することで、『游記』の「直言」が、当時どのように受け止められたかについて考察したい。

#### (1) 鈴木貫太郎(当時の侍従長・枢密顧問官)

拝啓 貴著中華五十年游記及中華教育視察紀要、今般杉博士ヲ経テ御寄贈ヲ辱ウシ候段感謝ノ至ニ有之、其内繰り拝読可仕、尚永ク書宝ノ珍トシテ保存可致候。将又御挨拶中対支事件ニ関スル御憂慮ハ全ク御同感ノ次第二御座候。先ハ不取敢謝辞申進度、如斯御座候。早々敬具

昭和六年九月九日 鈴木貫太郎  
松本亀次郎 殿 (下線は筆者による)

当時、侍従長兼枢密顧問官として天皇の側近にあり重臣であった鈴木が、「対支事件ニ関スル御憂慮ハ全ク御同感ノ次第二御座候」と、はっきりと陸軍の侵略政策に懸念を表明している点が特に注目される。

#### (2) 本庄繁(当時関東軍司令官)

拝啓、久敷御無音に打過候処益々御壮安奉大賀候。陳バ先般中華南北御巡遊ニ付御編述ノ五十年游記御恵送被下御厚志忝ク、最後の視察感想概括繰返シ拝見仕り、吾人モ主旨ト精神ニ於テ全然同感ニ有之、是非スクアリタキモノト存申候。只現実ノ問題ガ生ヤサシキモノニ無之、支那人全般ヲ

通シタル総括的觀察ニ於テ、革命的国權ノ一足飛ノ回復希望ニ燃へ、思慮アル人士ノ意見ノ如キ此空氣ニ圧倒サレアルニアラザル乎。…世界ノ動キヲ見ル時、日本ハドウシテモ一島国ニ自給自足ノ見込ナク是非共真ノ共存共栄ニ基ク經濟的自由活動ノ地歩ヲ大陸ニ確立セザルノ運命ニアリ。…吾人ハ決シテ支那ニ一撃ヲ加フベキ杯存ズルモノニハ無之モ、苟モ又断ジテ我日本ノ存立問題ヲ等閑ニ付スル能ワズ。之ニ至リテロ歎ニアラザル真正ノ日支親善ノ真ニ難キヲ歎ズルモノニ候。機モ至ラバ御垂教ヲ給ハリ度モノニ御座候。秋冷ノ候切ニ御自愛ヲ祈ル。右御礼旁如此ニ御座候。敬具  
八月三十日 本 庄 繁  
松 本 老 台 机 下 (下線は筆者による)

本庄は、長年北京や上海に武官として駐在した経験を持つ陸軍きつての中国通と言われ、松本は北京の京師法政学堂の教習を務めていた時に知己を得た。彼は8月30日付の礼状を松本に送る1か月前の8月1日に関東軍司令官の任を受けた。従って、9月18日の「満州事変」の作戦遂行の準備に余念がない慌ただしい日々に『游記』を何度も読み、返信を書いたのである。もとより満州事変前夜に関東軍司令官である本庄が民間人の松本に軍の最高機密(謀略的侵攻)を漏らすことなどありえない。ではなぜ礼状を送ったのか。それは日本への留学経験を持つ多くの中国の知日要人が敬愛する松本<sup>21</sup>の影響力を恐れるとともに「満州事変」の謀略性を隠蔽し、国民と世論が受け入れる正当的軍事行動を装うための宣伝戦略としての意図があったのではないかと考えられる。「満州事変」は、関東軍による「侵略的軍事侵攻」であったが、松本が『游記』を著した時点で、関東軍の「謀略性」と「侵略意図」について知る者は誰もいない。しかし、松本が長年の中国人留学生教育を通して得た識見と現地の視察を踏まえた上で、一教育者の立場で著した『游記』は、その内容があまりにも正鵠を得ていたために、本庄は「畏怖」を抱いたのではないかと考えられる。従って、返信内容は表面的には「敬意」を払いながらも、要所では『游記』の内容を否定し、「自己正当化」と「偽りの大義名分」を述べている。具体的には、以下の通りである。

① 本庄は、「最後ノ視察感想概括繰返シ拝見仕リ、

吾人モ主旨ト精神ニ於テ全然同感ニ有之、是非斯クアリタキモノト存申候。」と記し、松本が強く主張する「予は我が国家を愛すると同時に、…永遠に両国家の共存共栄を祈る」の一文に一見賛同しているかの様に読めるが、その後の文で「現実ノ問題ガ生ヤサシキモノニ無之」と述べ、現実的には無理であると否定している。

- ② 続いて「世界ノ動キヲ見ル時、日本ハドウシテモ一島国ニ自給自足ノ見込ナク是非共真ノ共存共栄ニ基ク經濟的自由活動ノ地歩ヲ大陸ニ確立セザルノ運命ニアリ。」とあるのは、日本による満州支配の「自己正当化」の論理である。これは返信直後の「満州事変」とその後の「傀儡国家・偽満州国」建国という事実を見れば明瞭である。
- ③ 更に、「決シテ支那ニ一撃ヲ加フベキ杯存ズルモノニハ無之モ、苟モ又断ジテ我日本ノ存立問題ヲ等閑ニ付スル能ワズ。」と述べていることは欺瞞である。「満州事変」は「謀略的軍事侵攻」であり、それを「等閑ニ付スル能ワズ」と言うのは、「自己防衛」のための軍事行動であるかのように装う「偽装工作」と読み取れるからである。
- ④ また「真正ノ日支親善ノ真ニ難キヲ歎ズル」は、「日支親善」を「大義名分」としながら、実際は「侵略的軍事侵攻」を隠蔽する言い訳である。

ところで筆者は、むしろ本庄が『游記』の中で注目した点は、「予が聴いた範囲では、張学良氏の評判は、中々良い。…学良氏は鬱勃たる雄志を蓄へて居る『御曹司に何が』と思って居る間にいつか驚天動地の大芝居を打ってアツ言はせる位の手腕を具へて居る。…将来内外注目的に成るのではなからうかと思はれる。」<sup>22</sup>という箇所であったと推測する。なぜなら本庄は、関東軍司令官として目下遂行せんとする「満州軍事進攻作戦」の攻撃目標である東北の実力者・張学良に対する松本の評価だからである。本庄は、この部分を何度も読み返したに違いないが、敢えて無視し返信では言及しなかった。否、無視せざるを得なかったのである。なぜなら、松本の中国に対する鋭い洞察力、さらに現地を視察し聴聞した上での指摘に対し、「満州軍事侵攻責任者」として、一抹の不安を覚えたのではないかと考えられるから

である。結局、「満州事変」の結果だけでは分らなかったが、その後の歴史で松本のこの予言的評価は的中した。それは日本軍が最も恐れる「第二次国共合作」による抗日統一戦線結成のきっかけとなった「西安事件」（1936 年 12 月）の立役者として、張学良が「アット言はせる」形で登場し、日本と世界が注目したからである。このことは、次章で論じる。

ところで汪向榮は、本庄の返信の内容に対して、「強盗の論理によって松本の意見に反駁し、…こうした論理は当時、日本の朝野に充満しており、本庄ら軍閥が日本国民を欺くために日夜用いる帝国主義者の口吻であった。」と厳しく指弾している。つまり、侵略を受けた中国側から見れば、軍事力で他国を侵略支配した上での「共存共栄」などは「強盗の論理」ということである。なお、日中戦争中に日本陸軍がマスコミを通して喧伝した「暴支膺懲」<sup>23</sup>という論理は、日本の「軍事侵略」の意図を隠し、日本軍の戦闘行為は横暴な中国人から日本居留民を保護するための「正当防衛」であるという「すり替えの論理」であり、日本国民を騙すための「大義名分」だった。古今東西、「侵略戦争」にはこうした「偽の大義名分」があるものである。ともあれ、鈴木と本庄の返信は内容こそ真逆だが、いずれも松本の識見と「直言」に対して敬意を払い、ある意味で（本庄は）畏怖したと考えられる。ところで『游記』は、日本の中国侵略政策に真っ向から異議を唱える「意見表明」であったことから反響は大きく、その後外務省から要請があり、松本は「東亜学校」の「名誉教頭」になり、同校の学校経営から退いた（65 歳）<sup>24</sup>。このことについて汪向榮は、「これは一種の迫害であった。東亜学校はそのとき外務省対支文化事業局の管轄となっており、退職要求はあきらかに、意見書を出したことに対する日本政府の反応であり、侵略政策に公然と反対した実直な老教育者に対する懲罰であった」<sup>25</sup>と指摘している。

## 4.2 戦時中の松本の言動と周囲の状況

『游記』により、松本は当局の注目するところとなったが、その後、特に戦時中の彼の言動や周囲の状況にはどのような変化があったのか。汪向榮は当時の自身の体験を踏まえて、次のように記している。

（松本は）その信念を堅持して中日文化交流のために働き、中国人留学生との接触をやめなかったばかりか、進歩的留学生の発行した刊行物『日文研究』の顧問（もう一人は郭沫若）にもなった。このため、彼は特別高等警察の監視対象となった。1937 年に日本が全面的に日中戦争を發動すると、彼の立場はいっそう困難になった。表面上は尊敬が払われ、手出しはしなかったが、実際は「反軍分子」として監視が強化された。住宅の周囲には私服警察が張り付いていて、彼を訪問する中国人留学生が尾行され、訪問回数が多くなると尋問をうけた。こうして、人が彼に近づけないようにしたのである。しかし、彼は中国を熱愛し、侵略戦争に反対する立場と主張を、けっして放棄しなかった。公然と意見をのべる機会にはもはやなかったけれども、利用できるあらゆる機会を利用して、慎重なやりかたと言葉によって、その信念を表明した。中国研究者と同席したときには、なんら憚ることなく、戦争の前途に対する彼の憂慮を述べた。<sup>26</sup>  
（下線は筆者による）

ここで「表面上は尊敬が払われ、手出しはしなかったが、実際は「反軍分子」として監視が強化された。」という点に注目する。なぜなら戦時下における松本の「特別な立場」が表現されているからである。筆者は、松本の遺族で亀次郎の曾孫に当たる松本健一氏に、戦時中の松本の状況について伺ったところ、関係者の証言として、書面にて以下の紹介があった。（2023 年 8 月 13 付松本健一氏の書信より一部抜粋）

洋一郎（筆者注：亀次郎の孫、健一氏の父）、叔父日出男、祖父幸平、祖母の妹など、杉並区阿佐ヶ谷の松本亀次郎宅で一緒に暮らしていた人から直接・間接的に見聞きしてきたこと（母からの説明も含む）：

- ① 阿佐ヶ谷の自宅には、よく中国の生徒が来られていた。奥の客間でいろいろなことを議論していた様子だった。
- ② 杉並区阿佐ヶ谷の自宅の前にはいつも憲

兵がいて亀次郎は監視されていたが、敬礼をされるなど、父も叔父も逆に守られていたようにあとになって思えたとのこと。反戦の訴えを鈴木貫太郎や本庄中将に行い返書も残っている中で、命は守るべき人物と思われていたのかもしれないとよく父や叔父は申ししておりました。

- ③ 電車の中で、中国人に向かってチャンコロ<sup>27</sup>と言うのを聞いた亀次郎は、その人間をきつく叱りつけたが、周りが騒然となり一緒にいた家族の者は家にたどり着くまで膝の震えがとまらなかった。また、亀次郎が「平和」という言葉を公の場で発した際には、当時は「反戦」と同義であったため、同じく周囲から恐怖を感じる場面もあった。
- ④ 教科書の送付依頼が中国からあった場合、阿佐ヶ谷の自宅できりとりまとめ発送をしていた。洋一郎の母、その妹(洋一郎の叔母)など、書籍の手配や郵送だけでも忙しかったが一冊の要請にも丁寧に応じていた。

以上は、戦時中の松本の言動と状況について最も良く知る同居家族の証言である。汪向榮もまた自分の体験を踏まえて次のように記している<sup>28</sup>。

あるとき、東亜の同級生に「あまり松本先生の家に行かないほうがいい、門のところに刑事がいて、面倒なことになるぞ」といわれました。そのことを先生にお話しすると、「もしなにかいわれても相手にせずに、私に知らせなさい」とおっしゃいました。あの当時の警察はひどく物ものしかった。東京に着いて登録にいったときも、すでに船内で書いた書類から私の素性を知っていました。それでも、そのごも先生のお宅に出入りしていました。刑事は私の家にも現れて、先生の家になにをしにいくのかとたずねました。勉強のことでいくのですとこたえと、そんなにしょっちゅういく必要があるのかと聞かれました。「ご近所ですからよくおじゃまするのです。」私はこうこたえました。すると刑事は

こういいました。「松本先生はすでに隠居されている。もう教育の仕事はやっていないのだから、用もないのにいく必要はあるまい」。のちに先生にこの話をすると、「かれらはひまなんだ、相手にすることはないよ」とだけおっしゃいました。だから私は、そのごもずっと先生とおつきあいをつづけたのです。

汪向榮はさらに松本の当時の折々の発言について、以下の通り述懐している。

- ① 「この戦争に日本が勝つはずがない。目下のところは日本が占領したり勝利したりもしているが、これはせいぜい二、三年のことで、すぐにそこでも負け、ここでも負けということになる。まあみていなさい。」と、先生はおっしゃっていました。先生はどこにいてもこうでした。<sup>29</sup>
- ② 先生はいつもこうおっしゃいました。「中国は日本にこれほどの恩恵をほどこしている。日本人はいま、徳をもってこれに報いるべきであり、侵略するなどもつてのほかだ。」<sup>30</sup>
- ③ 「仕事をする中で絶えず観察と思考を繰り返すうちに、中日両大民族は友好共存していかなければゆきづまってしまうと考えるようになった。友好といっても口先、表面上ではなく、心と心を通じあえるものでなくてはならない。自分の利益のために人を損なうような自分本位の行動は相反する結果を招くだけである。」<sup>31</sup>
- ④ 「今日、日本は国力を増し、列強の一つに数えられているが、中国の支持がなければ、国力を増したといってもそれは長く続くものではない、中日両国が相互理解を深め、長短相補いあうことによって、初めて弱肉強食の世界の中で、不敗の地位につくことができる」<sup>32</sup>
- ⑤ 1940年代に入ると、日本軍の威力は中国国土の半分と太平洋の一部にも及び、日本国民は勝利祝賀の熱狂に陥った。先生は再び「正義にあらざる戦争は勝利を収めるはずがない」、「中日両大民族は必ず永久平和に還らなければならない」、「今度の戦争は正義に基づいていないから、日本の勝利が永久につづくことはありえない」な

どと、度重ねて周囲の人々に訴えた。<sup>33</sup>

以上の松本の発言は、いずれも当時の日本の中国政策を真っ向から否定するものである。戦時下の日本は、厳しい言論統制下にあり、松本は常に「特高」監視下にあったことを考えれば、当然処罰の対象となる発言であった。しかし、当局はそうしなかった。否、できなかった。その理由は、松本が「中国人留学生教育の中心人物」として知られる存在であったからだけではない。当時の中国の知日要人の中には、日本に留学経験のある人が極めて多く、松本はそうした人々から師として尊敬される存在だったからである<sup>34</sup>。従って、当局は日中両国における松本の大きな影響力を無視することはできなかったのである。汪向榮はこの点について、次のように指摘している。

軍国主義分子の統制下にあった日本の政権は、侵略戦争を発動するため、政策や行為に反対したり非難したりすることを許さなかった。国内で弾圧を強化して思想を統一せんとするとき、このような公然の反対、中日関係悪化の責任を日本に帰する主張は、容認することのできないものであった。しかし、松本先生の中日関係における影響力や、中国の指導者に対する影響力によって、日本当局は一般人とおなじように彼を逮捕することはできなかった。<sup>35</sup>

(下線は筆者による)

以上のことから、松本の日中戦争に対する考えや言動、また当局が「敬意」を表しつつも常に「監視」し続けるという、松本の「特別な立場」が分かる。しかし松本は、中国人留学生・汪向榮の身を守るためには、たとえ「戦争反対」という当局批判をしたとしても、汪向榮の身を危険にさらす可能性のある、決して容認されない「不用意な発言」は絶対にしなかった。それは当時の日本にとって「特別な存在」であった周恩来についての発言である。

## 5. 抗日戦争指導者・周恩来

本章では、当時の日本で「特別な存在」であった「抗日戦争指導者・周恩来」について考察する。

### 5.1 留日後の周恩来

先ず本節では、周恩来が日本留学から帰国し、その後、欧州留学を経て中国革命・抗日戦争の指導者として活躍するようになるまでの経歴を概略する<sup>36</sup>。

周恩来は、日本留学中(1917年9月-1919年4月)に起きたロシア10月革命に大きな関心を持ち、社会主義学説やマルクス主義についての認識を深めた。1919年4月、日本留学から帰国するとすぐに「五四運動」<sup>37</sup>に遭遇し、抗議運動に参加。天津の学生運動の中心者として活動すると同時に同年9月に開校した南開大学の1期生として入学した。しかし、翌年1月、天津学生代表として省長との会見を要請すると逮捕・勾留されてしまった。約半年後に釈放されたが、逮捕・投獄の理由で南開大学の学籍を失ってしまったため、働きながら学ぶ「勤工儉学」制度を利用し、1920年11月、欧州に留学した(22歳)。尚この時の渡航費用は南開大学創立者・嚴範孫が援助した。1922年6月、パリで旅欧中国少年共産党を結成し、その後1924年9月、中国共産党中央の指示でフランスから帰国すると、同11月に黄埔軍官学校政治部主任に就任した(26歳)。その後1927年3月、上海労働者武装蜂起を指導し、同年7月には南昌武装蜂起も指導。1928年6月には中共政治局常務委員に就任した(30歳)。そして1936年12月に勃発し、国内外で注目を集めた「西安事件」では、中国共産党を代表して張学良と会談し、同事件の平和的解決を主導。その後1938年2月、国共合作に基づく国民政府軍事委員会政治部の副部長に就任した(40歳)。

以上の通り、汪向榮が周恩来について質問した時期(1940年秋-1941年春)、周恩来は「抗日戦争指導者」として、日本ではすでに有名な存在であった。

### 5.2 日中戦争中の周恩来に関するマスコミ報道

本節では、日中戦争中、周恩来が日本でどのように知られていたのか。戦前の朝日新聞と読売新聞の報道記事に基づき、以下の通り、調査・分析した。なお、調査の対象期間は、昭和初期から松本と汪が懇談した1941年までとした。また検索ワードを周恩来と毛沢東にしたのは、中国共産党トップ・毛沢東と比較することで、日本のマスコミの周恩来への注



目度がより明らかになると考えるからである。

- ・調査対象：朝日新聞(朝日クロスサーチ)  
読売新聞(ヨミダス歴史館)
  - ・検索キーワード：周恩来・毛沢東
  - ・対象期間：1926年1月1日-1941年12月31日
- 以上の調査結果は、表1の通りである。

表1 周恩来と毛沢東に関する記事数(西暦順)

| 年    | 朝日 |    | 読売 |    | 特記事項                      |
|------|----|----|----|----|---------------------------|
|      | 周  | 毛  | 周  | 毛  |                           |
| 1926 | 1  | 0  | 0  | 0  | 北伐開始                      |
| 1927 | 0  | 0  | 0  | 0  | 南昌蜂起                      |
| 1928 | 0  | 1  | 0  | 0  | 張作霖爆殺                     |
| 1929 | 0  | 1  | 0  | 0  | 排日・抗日運動活発化                |
| 1930 | 0  | 5  | 0  | 0  | 松本訪中教育視察                  |
| 1931 | 0  | 3  | 0  | 2  | 満州事変勃発                    |
| 1932 | 0  | 1  | 0  | 2  | 「満州国」建国                   |
| 1933 | 0  | 3  | 0  | 3  | 日本国際連盟脱退                  |
| 1934 | 0  | 2  | 0  | 1  | 長征開始                      |
| 1935 | 1  | 16 | 0  | 10 | 華北分離工作本格化                 |
| 1936 | 2  | 22 | 1  | 10 | 西安事件(12月)                 |
| 1937 | 26 | 41 | 33 | 30 | 日中全面戦争, 第2次<br>国共合作, 南京事件 |
| 1938 | 50 | 38 | 40 | 39 | 周恩来, 国府軍事委員<br>会政治部副部長に就任 |
| 1939 | 45 | 48 | 48 | 52 | 重慶無差別爆撃開始                 |
| 1940 | 30 | 25 | 10 | 14 | 汪精衛傀儡政権成立                 |
| 1941 | 37 | 29 | 19 | 14 | 太平洋戦争勃発                   |

表1のデータから分かることは、1936年12月に勃発した「西安事件」以降、周恩来に関する報道記事が中国共産党トップの毛沢東と同等またはそれ以上の扱いで急増していることである。また例えば、図1は、周恩来が国共合作後、共産党代表として国府軍事委員会政治部副部長に就任したことを正式に報じたものである。図2は、国共合作後の共産党の動向を報じた記事だが、周恩来が党トップの毛沢東と軍責任者の朱徳二人の上に掲載されていることから、日本における周恩来に対する関心の高さが分かる。



図1 1938年12月16日付読売新聞  
(周恩来の単独記事)



図2 1939年6月4日付東京朝日新聞  
(上が周恩来, 下が毛沢東と朱徳)

なお、「西安事件」は国民党軍の張学良が西安で同軍トップの蒋介石を拘留し、共産党と合作して日本に抵抗することを求めた事件で、内外から大きな注目を集めた。しかし、蒋介石は張学良の要求を拒絶したため、周恩来が共産党代表として西安に飛来し、蒋介石への説得に当たった。その結果、同事件は平和的に解決し、その後第2次国共合作による抗日民族統一戦線が実現した。同事件は、蒋介石がそれまで固執した「安内攘外」<sup>38</sup>政策による内戦を停止し、対外政策の一致へと転換させるものであった<sup>39</sup>。また同時に「日本にとっても大きな衝撃であった」<sup>40</sup>大事件であり、日本は対中政策の再検討を迫られた。なぜなら当時の日本軍にとって、中国が内戦状態であることが対中政策の前提であったため、抗日民族統一戦線の誕生は日本にとって最悪の事態であったからである。

以上のことから、汪向榮が「周恩来を教えられましたか」と松本に質問した時期の周恩来は、日本において最も注目される「抗日戦争指導者」として報道される「特別な存在」であったのである。しかし同時に、周恩来は中国でも「特別な存在」であったと言える。なぜなら「西安事件」とその後の抗日民族統一戦線において、先頭に立って活躍する周恩来は、特に団結して抗日に当たることを求める進歩的

学生等から支持を得ており、汪向榮はまさにその一人であった。そして汪向榮は、周恩来がかつて日本に留学し「東亜学校」で学んだことを知っていたのである。ともあれ、当時日本で「特別な存在」として危険視されていた「抗日戦争指導者・周恩来」について、松本がもし「おぼえている」と真実を語った場合、同様に「特高」監視下にあった中国人留学生・汪向榮の身を危険にさらす可能性があるかと判断し、汪向榮を守るために、敢えて「おぼえていない」と語った松本の真意が推測できるのである。

### 5.3 松本の「抗日戦争指導者・周恩来」への真情

本節では、当時の日本社会で「中国人留学生が帰国後皆抗日に走る」等と批判されることに対して、松本はどのように反論し、中国人留学生の帰国後をどのように見守っていたのかについて考察する。

松本は、次の様に述べている。

- ① 留学生教育の効果如何は、往々にして世人に疑はれる所であるが、予の意見では、留学生中から、中華重要な人物が、多数に輩出して居るのを以て、効果の第一としたいのである。…一部少数の留学生が、偶々我が時々更迭する政府の政策に反対したからと云って、忽ちそれに色を附けて『某は排日の巨頭だ』などと言って、黒星にするのは、我自ら友を失ふもので、予の取らざる所である。<sup>41</sup>
- ② 政府の政策がおかしくなってから長いこと経つので、抗日の第一線にいる指導者の中には、日本留学をして帰国したものが少くない。もし政策が改められないならば、この先を想像しただけでもたまらない気持だ。…中国留日学生が帰国後抗日に走るのを責めるばかりで、どのように学生に対してきたかを自問しないのは、気に縁りて魚を求むと同じである。<sup>42</sup>
- ③ 排日・抗日運動はみな日本の政治家や軍部の政策行動が引きおこしたものである。原因を除去しさえすれば、かうした抗日や排日は自づと存在しなくなる。…問題は日本の対華政策にある。<sup>43</sup>（下線は筆者による）

以上の通り、松本はどこまでも中国人留学生の立場に立ち、「中国人留学生が排日・抗日に走るのは、日本政府の誤った政策に原因がある」と主張した。中でも注目されるのは、『某は排日の巨頭だ』などと言って、黒星にするのは、我自ら友を失ふもので、予の取らざる所である」と述べ、たとえ「排日・反日分子」になったとしても、決して「悪のレッテルを貼らない」と断言していることである。ある意味で、この「排日の巨頭」の代表こそ、「抗日戦争指導者・周恩来」と言える。また「もし政策が改められないならば、この先を想像しただけでもたまらない気持だ」との発言は、松本がどこまでも中国人留学生の前途を心配しながら見守っている真情が表れている。それは、松本が「個人教授」までして将来を期待した周恩来に対しても同じ真情であったに違いない。

### 6. おわりに

冒頭で記した通り、1895年の台湾統治から1945年の第2次世界大戦終結までの日本語教育は、「侵略的日本語普及教育の時代」と呼ばれように「負の側面」が大きい。しかし一方で、同時期に松本が生涯を捧げた中国人留学生教育と日本語教育は「中国の近代化」に果たした「正の側面」が大きかったことを指摘したい。汪向榮は、中日関係史研究家の立場から、「歴史的な観点から見れば、松本先生は新中国建設に身を投じた沢山の留学生を直接に教育したばかりでなく、その著作を通じて中国が近代化するために必要な知識の吸収に助力したという点でも間接的に人材を養成されたと言える。この事は中国の近代化に大きな作用をもたらした。」<sup>44</sup>と述べている。しかし、このような松本の存在は一部の関係者を除いて、戦後長く日本社会では忘れられていた。その彼の存在を日中両国で再び知らしめたのは、教え子である周恩来であった。それは1979年、周恩来夫人の鄧穎超氏が来日した際に、周恩来の遺言として、かつて日本留学時に世話になったことを松本の遺族に伝えたからである<sup>45</sup>。松本は生前、「今日私の教育している学生は、いずれ必ず中国の中心になるものと、私は信じている」<sup>46</sup>との信念で中国人留学生教育に生涯を捧げ、終生「日中親善・共存共栄」を訴え続けたが、終戦直後に亡くなった。一方、戦前「抗日戦争

指導者」として「特別な存在」であった周恩来は、抗日戦争に勝利し、新中国成立後、「総理兼外交部長」となり、「中日国交回復」のために終生主導的役割を果たした。そして1972年9月、終に両国の「戦争状態の終結」と「国交正常化」を実現させたのである。周恩来は、「日本は中国を侵略し、われわれに塗炭の苦しみを与えた。しかし日本には松本亀次郎のような人もいた」<sup>47</sup>と語ったという。そして両国の「平和友好・共存共栄」の重要性について、「極東では日本と中国との関係が平和に対して決定的役割を果たす。我々両国が友好なら双方にとって有利であり、非友好なら双方にとって不利だ。我々は友好なら、共存共栄できる。友好でなかったら、生存も繁栄も脅かされる。」<sup>48</sup>と述べている。この周恩来の発言は、時代と社会がどのように変わろうとも、両国にとって受け継がれるべき、「永遠の指針」といえよう。そして、松本が生涯を捧げた中国人留学生教育のあり方は、今日、中国のみならず世界中で行われている日本語教育にとっても、「亀鏡」とすべきではないだろうか。

最後に今後の課題として、岩澤(2021)が指摘している「松本に関する研究は、「教育実践」に関する研究が比較的多い一方で、「日本語教科書」に関する研究は少ない」という点について、その要因の一つは、松本編纂の日本語教科書は基本的に日中対訳であり、中国語だけで書かれている部分も多いので、中国語が理解できないと研究が深まらないためではないかと推測される。従って、今後は日中両言語を理解する両国の研究者が、日中言語対照研究の視点から、松本の日本語教科書の研究を進めることを望みたい。

## 注

1. 関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク, p.5
2. さねとうけいしゅう(1981)『中国留学生史談』第一書房, p.340
3. 竹内実監修・鐘少華編著(2003)『あのころの日本ー若き日の留学を語るー』日本僑報社, p.266
4. 「宏文学院」は、嘉納治五郎が1902年、清国留学生のために設立。初めは「弘文学院」と称したが後に「宏文学院」に改称。
5. 松本亀次郎(1939)「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』7(4)岩波書店, pp.52-53
6. 「日華同人共立」という校名は、中国人留学生・曾横海の精神的な応援に対する功に敬意を表するためであって経済的な理由からではない。
7. 王永祥・高橋強(2002)『周恩来と日本：苦悩から飛翔への青春』白帝社, p.91
8. 汪向荣(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社 p.242
9. 汪(1991)前掲書, pp.229-232
10. 汪(1991)前掲書, pp.232-243
11. 汪(1991)前掲書, pp.219-258
12. 竹内・鐘(2003)前掲書, pp.252-271
13. 「治安維持法」は、1925年、天皇を中心とする国家体制や私有財産を否定する結社や行動を禁止することを目的として制定された法律。特に社会主義運動や労働運動が取り締まり対象となった。
14. 岩澤平(2020)「松本亀次郎の教育理念と実践に関する一考察ー松本亀次郎と周恩来の師弟関係を通してー」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』21, pp.155-166
15. 松本亀次郎(1931)『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』東亜書房。岩澤(2020)では同書を『遊記』と略称。
16. 松本(1931)前掲書『中華五十日游記』, p.1
17. 松本(1931)前掲書『中華教育視察紀要』, pp.124-126
18. 鈴木貫太郎(1868-1948)は、日本海軍軍人(最終階級は海軍大将)、政治家。鈴木は海軍の長老で、新英米派のため陸軍からは敵視されていた。1945年の終戦の際、総理大臣として陸軍の反対を押し切り、ポツダム宣言を受託した。
19. 本庄繁(1876-1945)は、日本陸軍軍人。「満州事変」では関東軍司令官として指揮を執った。戦後1945年11月、「戦争犯罪人」として逮捕されることが分かり割腹自殺した。
20. 「書信」は、平野日出雄(1982)『日中教育のかけ橋ー松本亀次郎伝ー』静岡教育出版社 pp.247-255を参照した。なお、「書信」は、掛川市立大東図書館に保管されている。
21. さねとう(1981)前掲書, pp.358-359
22. 松本前掲書『中華五十日游記』, pp.192-193
23. 「暴支膺懲」(ぼうししょうちよう)とは、日中戦争中

に日本軍が日本国民に対して、中国における軍事行動は邦人保護のためであり、「横暴な支那(中国)を懲らしめよ」というスローガンとして使った。

24. 松本は、「中国教育視察旅行」を行う5年前(1925年)、外務省の支援を受けて学校経営を安定させるために、東亜高等予備学校を日華学会(中国人留学生を支援する団体)に合併譲渡した。その際、彼の職責は「校長」から「教頭」に変わった。
25. 汪(1991)前掲書, p.253
26. 汪(1991)前掲書, p.253
27. 「チャンコロ」は、当時の中国人に対する蔑称。
28. 竹内・鐘(2003)前掲書, pp.270-271
29. 汪(1991)前掲書, p.268
30. 汪(1991)前掲書, p.269
31. 平野(1982)前掲書, pp.284-285
32. 平野(1982)前掲書, p.287
33. 武田勝彦(1995)『松本亀次郎の生涯 周恩来・魯迅の師』早稲田大学出版部, pp.iii-iv
34. 平野(1982)前掲書, pp.246-247
35. 汪(1991)前掲書, p.252
36. 本節は、主に高橋強・川崎高志(2004)『周恩来・人民の宰相』第三文明社を参照した。
37. 「五四運動」は、1919年5月4日、日本の「対華21ヶ条要求」撤廃を要求した中国の民衆運動。
38. 「安内攘外(あんないじょうがい)」は、蒋介石が推進した「中国国内を統一(共産党打倒)した後、外国＝日本に抵抗する」という政策。
39. 日中韓3国共同歴史編纂委員会(2012)『新しい東アジアの近現代史・上－国際関係の変動で読む未来を開く歴史－』日本評論社, p.111
40. 波多野澄雄・戸部良一・松本崇・庄司潤一郎・川島真(2018)『決定版 日中戦争』新潮社, p.45
41. 松本(1931)前掲書『中華五十日游記緒言』, pp.2-3
42. 平野(1982)前掲書, pp.286-287
43. 汪(1991)前掲書, pp.248-249
44. 平野(1982)前掲書, p.285
45. 岩澤(2020)前掲論文, p.156
46. 汪(1991)前掲書, pp.236-237
47. 鷺山(2015)前掲論文, p.12
48. 曹応旺(2018)『周恩来の述懐』中国出版トーハン, p.27

## 引用文献

- 岩澤平(2020)「松本亀次郎の教育理念と実践に関する一考察－松本亀次郎と周恩来の師弟関係を通して－」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』21, pp.155-166
- 岩澤平(2021)「松本亀次郎編纂の日本語教科書に関する一考察－日中言語対照研究の視点から－」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』22, pp.317-328
- 王永祥・高橋強(2002)『周恩来と日本：苦悩から飛翔への青春』白帝社
- 汪向荣(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
- 曹応旺(2018)『周恩来の述懐』中国出版トーハン
- 高橋強・川崎高志(2004)『周恩来・人民の宰相』第三文明社
- 竹内実監修・鐘少華編著(2003)『あのころの日本－若き日の留学を語る－』日本僑報社
- 武田勝彦(1995)『松本亀次郎の生涯 周恩来・魯迅の師』早稲田大学出版部
- 日中韓3国共同歴史編纂委員会(2012)『新しい東アジアの近現代史・上－国際関係の変動で読む未来を開く歴史－』日本評論社
- 波多野澄雄・戸部良一・松本崇・庄司潤一郎・川島真(2018)『決定版 日中戦争』新潮社
- 平野日出雄(1982)『日中教育のかけ橋－松本亀次郎伝－』静岡教育出版社
- 松本亀次郎(1931)『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』東亜書房
- 鷺山泰彦(2015)「周恩来の日本留学と東亜学校校長の松本亀次郎」『亜州文化』32, pp.12-25

## 付記

松本亀次郎先生が、1913年に日本大学の教室において「日華同人共立・東亜高等予備学校」の前身である「日本語講習会」を開いてより、本年110年の佳節を迎えたことを記念し、脱稿する。

(Received: January 17, 2024)

(Issued in internet Edition: February 1, 2024)